言語的な表示規則を用いる場面の探索的検討

—P-F スタディの図版を用いて—

○田村綾菜

(愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所)

キーワード：言語的な表示規則、P-F スタディ

The scenes verbal display rules are used: An exploratory study with P-F study

Ayana TAMURA

(Institute for Developmental Research, Aichi Human Service Center)

Key Words: verbal display rules, P-F study

目 的

表示規則 (display rules) とは、どのような場面でどのような情動を表出すべきかといった情動表出に関するルールのこと (Ekman & Friesen, 1969)、例えば、期待外れのプレゼンテーションをもらってもポジティブに反応するといったものである。これまでの研究では、主に表情などの非言語的な表出の調整に焦点があてられてきたが、言語表出の調整にも同様のルールが存在すると考えられる。そこで、本研究では言語的な表示規則の使用に焦点を当て、どのような場面で言語表出を調整するのかを探索的に検討することを目的とした。その際、対人場面における発言を求めており、言語表出行為を検討するのに適していると考えられる P-F スタディ (絵画を用いた場面構成で、日常生活でよく経験するようなフラストレーション場面における対人の発言を調べ、その反応を分析し、攻撃性の方向と型からその人の性格を診断する質問紙形式のテスト (林, 2007)) の図版を用いることとした。

方 法

調査参加者 マクロミル社のモニタとして事前に登録している 20 代から 60 代の男女 120 名 (男性 54 名, 女性 66 名) がインターネットを通して調査に参加した。

材料 P-F スタディ児童用日本版Ⅲ版 (三京房) をもとに、課題を作成した。児童用を利用したのは、今後、児童を対象とした研究を行うための予備調査として行ったためである。各場面について、P-F スタディの図版における右側の人物の内心を表す吹き出しを加え、内心と発言をそれぞれ自由に記述してもらった。なお、調査参加者の負担を軽減するため、全 24 場面を 6 場面ずつに分けた計 4 種類の課題を作成し、それぞれ 30 名ずつに割り当てた。

結 果

内心と発言それぞれの回答について、林 (2007) の手引きに基づき分類した。各場面に対する回答は、アグレッションの方向 (他責・自責・無責) とアグレッションの型 (障害優位・自我防衛・要求固執) の二つの次元から評価され、さらにアグレッションの方向と型の組み合わせからなる評定因子に分類される。今回は探索的に、アグレッションの方向が内心と発言が不一致だったものを「言語的な表示規則」を使用したとみなし、場面ごとに不一致率を求めた (表 1)。不一致の反応としては、内心は他責反応、発言は自責反応または無責反応に分類されるものが多かった。

フラストレーションの原因が自己にあるかどうかによって不一致率が異なるかどうかを検討したところ、自我阻害場面 (原因が自己以外ある場面) における平均不一致率は $54.2 \pm 0.23\%$ 、超自我阻害場面 (原因が自己にある場面) における平均不一致率は $56.7 \pm 0.21\%$ で、場面による差は有意ではなかった ($t(22)=0.26, p=.80$)。また、発言相手によって不一致率が異なるかどうかを検討したところ、相手が大人では $49.8 \pm 0.21\%$ 、子どもでは $63.7 \pm 0.20\%$ で、場面による差は有意ではなかった

($t(22)=0.26, p=.80$)。

考 察

言語的な表示規則として、心の中では相手に攻撃したい欲求をもちながら、意識的に抑制している反応が多くみられたが、フラストレーションの原因が自己にあるかどうかや、発言相手が大人か子どもかといった要因によって使用頻度に違いはみられなかった。今回はアグレッションの方向の不一致率に着目したが、アグレッションの型や評定因子の不一致率についても今後検討する必要がある。

引用文献

Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98.

林 勝造 (2007). *P-F スタディ解説* 三京房

付 記

本研究は JSPS 科研費 25780395 の助成を受けたものです。

表1. P-Fスタディの場面ごとの内心と発言におけるアグレッションの方向の不一致率

場面	不一致率	発言相手
<u>22</u>	92.0%	大人
<u>24</u>	75.0%	大人
<u>10</u>	72.9%	大人
<u>20</u>	72.2%	子ども
<u>15</u>	70.7%	大人
<u>17</u>	66.1%	大人
<u>18</u>	62.5%	子ども
<u>5</u>	54.8%	大人
<u>11</u>	47.7%	大人
<u>16</u>	44.7%	大人
<u>13</u>	44.4%	大人
<u>23</u>	44.2%	大人
<u>12</u>	44.0%	子ども
<u>6</u>	39.1%	子ども
<u>19</u>	34.0%	大人
<u>14</u>	33.9%	大人
<u>7</u>	31.0%	大人
<u>8</u>	27.8%	子ども
<u>1</u>	22.7%	大人
<u>9</u>	22.4%	子ども
<u>2</u>	20.5%	子ども
<u>3</u>	19.4%	子ども
<u>21</u>	18.4%	子ども
<u>4</u>	18.2%	大人

注：場面番号の下線は超自我阻害場面